

はつきり言つてカケラも興味はございません
身勝手な婚約者とはお別れします

Character

ダイアナ・カタロニア

公爵令嬢で
第二王子の婚約者。
エリザベスのよき友人。

アナスタシア・カリスタ

エリザベスの母。
「妖精姫」と呼ばれるほどの
美貌の持ち主。

ルーク・カリスタ

エリザベスの父。
国内外で多数の商会を
経営するやり手。

アルバート・クシュリナ

隣国クシュリナ王国の王太子。
ドロシー王女に一目惚れされて婚約。
幼い頃にエリザベスと
家族ぐるみで会っていて……!?

イーサン・ブレンディ

エリザベスの婚約者で侯爵令息。
近衛騎士として、常にドロシー王女と
行動を共にしている。

ドロシー・クレメンティン

クレメンティン王国の王女。
容姿の優れた男性が好きで、
イーサンを侍らせている。

エリザベス・カリスタ

カリスタ伯爵家の一人娘。
伯爵家を継ぐため、領地運営や
商会経営について学ぶ才女。
婚約者のイーサンに放置されている。

目次

はつきり言ってカケラも興味はございません
身勝手な婚約者とはお別れします

番外編 イーサン・ブレンディの独白

番外編 王太子アルバートの独白

はつきり言つてカケラも興味はございません
身勝手な婚約者とはお別れします

プロローグ

手にしていた紅茶のカップをテーブルに戻すと、私はふうと息を吐きます。そろそろ時間ですわね。

ここは王都にある人気のカフェ。私は目の前に座る女性に、にっこりと微笑みかけます。

「美味しかったわね、ミリア。そろそろ帰りましょうか」

「はい。エリザベス様」

ミリアがスッと立ち、お会計をしてくれている間に私はゆっくりと立ち上がります。

私、エリザベス・カリスタはカリスタ伯爵家の一人娘。

カリスタ伯爵家は爵位こそ伯爵ですが、やり手と言われるお父様がたくさんの商会を手がけているおかげで、クレメンタイン王国一番の資産家です。現在は、王国の財源になる税金のうち六割近くを我が家が納めています。

そんな我が家に援助を求めてこられたのが、ブレンディ侯爵家です。

ブレンディ侯爵家は、長男のイーサン様と私の婚約を打診してくれました。

本来なら、イーサン様は侯爵家を継ぐ存在。そのイーサン様を差し出すことで覚悟を示し、我が家からの援助を強固なものにしようと考えたようです。

お父様はいくつかの条件を出した上で、婚約を受け入れました。もちろん、私の同意のもとです。というわけで、私とイーサン様は十五歳の年に婚約したのです。

「ミリア、お顔に皺を寄せては駄目よ」

店を出てカリスタ伯爵家の馬車に乗り、ミリアと向かい合って座ると、私はツン！ とミリアの眉間を指で突きます。

私付きの専属侍女で、私と同一年のミリア。

彼女は侍女として優秀なだけでなく、護衛も兼ねられるほどの武術の腕前の持ち主です。貴族に仕える使用人らしく、感情を表情に出さない思慮深さも持っています。

ですが、そのミリアが私と婚約者であるイーサン様との交流日だけは、ムツとした表情をするのです。

「申し訳ございません」

「ふふ。怒ってはいなくてよ。だけど、私は全く気にしていませんから、ミリアも気にしないでいいのよ」

まあそうは言っても、この事態に怒っているのはミリアだけではないのですけど。

カリスタ伯爵家に仕える使用人たちは、家令から庭師に至るまで全員がイーサン様を嫌って

ます。

というのも、イーサン様が、私と婚約者としての交流を全くしないからなんです。

ミリアの不機嫌も、使用人たちの怒りも私を思つてのことですし、気持ちは理解できますから叱しかつたりしませんわ。

でも、私は本当に、全く気にしていないのですが。

それに、イーサン様の気持ちもほんの少し理解できます。

イーサン様からしたら、手に入るはずだった椅子を突然奪われたという、理不尽な思いがあったのかもしれない。だって私と婚約しなければ、イーサン様は侯爵になれるはずだったのですから。もつともお決めたのは現侯爵で、しかも資金援助が目的だったのですから、私が責められるのはお門違いかどちがひですけど。

既にカリスタ伯爵家は、私が継ぐことは決まっています。そのため、お父様はイーサン様に、ご自分の目指す道を見つけることを婚約の条件のひとつとして出しました。

そして、イーサン様は騎士を目指すことになったのです。

ですが、イーサン様は納得がいかなかったのか、最初から私と交流しようとはなさいませんでした。

それどころか、婚約が決定した時に私にこう宣言されたのです。

『俺は金でお前に買われたのだから、結婚はしてやる！　だが、俺は必ず近衛騎士になり、王女殿下の騎士になる。だから、俺に何も求めるな』

お金で買われたことを理解しているのだしたら、最低限の交流はなさるべきだと思うのですが、ご本人がそうおっしゃるのですから仕方ありません。

婚約後、ブレンディ侯爵家は、月に一度は婚約者同士交流するようと、王都にあるカフェを交流の場として予約してくださるようになりました。ですが、イーサン様がいらしてくださったことは一度もありません。

私もそのことを分かっているものの、一応侯爵家からのお誘いですので出向かないわけにはまいりません。お断りしてもいいのですが、断ったことをあとでどうこう言われても面倒ですし、ミリアと出向くことにしているのです。

どうせイーサン様はいらっしゃいませんから、本来なら主人と同席することのない侍女を向かいの空いた席に座らせます。

だって、毎月有名なカフェで一人でお茶をいただいているなんて、約束をすっぱかされた哀れな令嬢そのものじゃないですか。

まあ正直なところ私は気にしませんけど、せっかく空いた席があるのですから、ミリアと歓談しながらお茶をいただいたほうが楽しいでしょう。

そういう事情があつて、毎月の交流日にはミリアは不機嫌になるのです。

私を蔑^{へんがし}ろにしているイーサン様のことを、決闘を申し込みたいくらい嫌っているようですわ。

私としては月に一度、こうやってミリアとお茶をいただけるのですから、逆にありがたいというか、むしろ来ないでほしいくらいですわ。

イーサン様は、この春から王女様付きの近衛騎士になることが決まったそうです。

クレメンタイン王国第一王女である、ドロシー・クレメンタイン様。

私たちと同じ年で、輝く金髪に、澄^すんだ青い瞳をされたお美しい方とのことです。

クレメンタイン王国は女性でも王位を継ぐことが許されていますが、ドロシー王女にはお兄様が二人いらっしやいます。そのため、ドロシー王女は十二歳の頃から、他国の王族の方と婚約されているのです。

王女殿下付きの近衛騎士は、興^こ入れにもついていくことができます。

イーサン様は、ドロシー王女についていくつもりなのでしょうか。

カリスタ伯爵家に戻り、自室で今日のことを日記帳に記します。

今日の日付にカフェに入った時間、カフェの店名と案内された席、滞在した時間といただいたお茶やお菓子の種類に至るまで、しっかり書き記します。

これは『証拠』なのです。

二年前からつけ始めた日記は既に二冊目。感情は書いていませんから、日記というよりは、単なる記録文書みたいなものですわね。

一冊目の日記帳をめくると最初のページには、あの『結婚してやる』宣言が記されています。

あの日は本当に驚きました。

お父様と侯爵に促され、イーサン様に我が家の庭をご案内したのですけど、二人きりになった途端に、あの発言でしたもの。

私が何も言わないうちに、イーサン様はふん！ と顔を背けて、ご両親のもとに戻っていかれました。

庭での滞在時間は五分もありませんでした。

燃えるような真っ赤な髪をした青年に睨^{にら}まれて、あんな発言をされたのです。

私は伯爵令嬢として、家族から使用人たちからも大切にされて育ちました。ですから、あのようには悪意を向けられたことなんてなかったのです。

私、驚きのあまり言葉を失ってしまいましたわ。

早々に戻ってきた息子に、侯爵夫妻は驚いていたようですが、イーサン様は「帰ろう」と押し切ったそうですわ。

今思うと、あの時にもっと強く婚約の撤回を願うべきでしたわ。

もちろん、両親にはイーサン様の発言を報告しました。

ですが、相手は十五歳の多感な年頃の青年です。しかも、次期侯爵の地位を奪われたばかり。私も多少、イーサン様に同情していたところがありましたの。

もちろん両親は、ブレンディ侯爵家に抗議してくださいましたわ。すぐに侯爵から謝罪の手紙が届きましたが、イーサン様からの謝罪はありませんでした。

まあ、心のこもっていない謝罪など意味がありませんけどね。

そもそも、私とイーサン様の婚約は政略によるもの。

資金援助を願うブレンディ侯爵家と、ある思惑のあった我が伯爵家。

私だって、貴族家の娘として仕方なく婚約を受け入れましたのよ。

それなのに、一方的にあんな暴言を吐かれるなんて。同情なんてせずに、さつさと婚約解消を願うべきでしたわね。

第一章 学園入学に向けて

クレメンタイン王国では、貴族の令息令嬢は十七歳から二年間王立学園に通い、卒業をもって成人となります。

なので、私もこの春に王立学園に入学いたします。

今から憂鬱ゆううつですわ。だって、学園にはイーサン様と王女様も入学されますもの。面倒事が起きる予感しかしません。

私は別に、イーサン様が王女様を大切になさろうと、近衛騎士として王女様の嫁よめぎ先についていかれようと、どうでもいいのですが。

ああ、もちろんついていく前に婚約は解消していただきますけど。

私はカリスタ伯爵家の後継なのです。夫が他国に常駐するなど、認められませんわ。

そもそも、そんなことを許容するほどの情なんて、イーサン様に対してありませんし。

ですが、あの『結婚はしてやる』発言。

まるで私がイーサン様に懸想けそうしているみたいではありませんか。そんな事実ありませんのに、イーサン様に勘違いされていたら……

そう考えると、学園に通うのがとても憂鬱ですの。

「気が進みませんわ」

「あらあら。でも確かに、馬鹿の相手は気が滅入るわよね。我が家は別に、学園で他の貴族との縁を繋ぐ必要はないし」

そうおっしゃるのは、私のお母様であるアナスタシア・カリスタ。

ふわふわとした淡いピンク色の髪に、同じ色の瞳をした可愛らしい女性で、とても十七歳の娘がいるとは思えない若々しさです。

我が親ですけど、並んでいると姉妹に見られます。しかも、私が姉に間違われる始末。

そのうち、私が母親だと勘違いされる日がくるのではないかと、今から不安です。

そんなお母様は、お父様に一目惚れして結婚したのだとか。

お父様は、銀髪に銀色の瞳をした美丈夫です。

私はそんなお父様譲りのストレートの銀髪に、お母様譲りのピンク色の瞳をしています。容姿は上の下……いいえ、少なくとも中の上くらいだと自負しています。

図々しいと思われるかもしれませんが、あのお母様とお父様の遺伝子を継いでいますもの。お母様ほどでなくても、それなりの容姿だとは思いますがのよ。

「憂鬱ですが、通わないわけにはまいりませんものね」

学園を卒業しなければ、成人貴族とは認めてもらえません。面倒ですが、仕方ありませんわ。

「あら。なら、スキップ制度を使えばよいのではないかしら」

「スキップ制度ですか？」

「ええ。入学式と卒業式、あとは月に一回は登校しなければならぬけど、試験さえクリアすれば普段の登校は免除されるのよ」

そんな制度がありますのね。

クレメンティン王国の貴族にとって王立学園に通うのは義務ですから、入学の説明会なんてわざわざ開かれません。それに、私には兄や姉もいませんから、全く知りませんでしたわ。

「わたくしたちの時代にできたのよ。リズが望むなら、お父様にお話ししてみたら？ スキップ制度を使うことを駄目とは思わないと思うわ」

お母様と相談の上、早速、お父様にスキップ制度の利用について相談することにいたしました。そして、その場で衝撃的な事実が判明いたしましたの。

なんと、王立学園のスキップ制度は、お母様のために作られたものだったのです。びっくりですわ。

私のお母様は、三十代後半となった今でもとても愛らしく、男女問わず人気があります。

その人氣が……当時はもつと酷かったそうで、授業もまともにできないほどだったそうです。

そんなことがあって、スキップ制度ができたのだとお父様からお聞きました。

幸いにもお母様はとても優秀だったのと、既にお父様と婚約することが決まっていたため、特に

学園に通う意義を感じなかったのだそうです。

お母様はお父様のことが大好きですから、他の人など煩わしい以外の何ものでもなかったみたいですわ。

当時のお父様は伯爵令息でしたし、もしお母様が普通に学園に通われていたとしたら、たとえば婚約していても高位貴族の方々は圧力をかけてきたかもしれません。

まあ、お父様がそのような方々に負けるとは思いませんが。

経緯はともかく、そういう理由でスキップ制度ができたのだそうです。

「お父様、私スキップ制度を使いたいと思いますわ。学園に通わなければ、その分領地経営も学べますし」

既に領地経営の勉強は始めていましたけど、学園に通わなくて済むなら実地経験も積めますわ。

それに、何度も言いますがイーサン様やドロシー王女に絡まれると面倒なのです。

私が望んだわけでもないのに、まるで我が家が無理やり婚約を進めたように言われるのは不本意ですもの。

いえ、もしかしたらご本人たちが絡んでこなくても、他の人が絡んでくる可能性だってありますわ。私とイーサン様が婚約していることは周知の事実ですし、ご存知の上で私より王女様のほうがイーサン様に相応しい、と嫌味を言うてくる方だっているでしょう。

私もその点に関しては同意しますし、なんならイーサン様が婚約を解消するとおっしゃってください

されば、喜んで解消いたしますのに。初対面の女性に、あんな暴言を吐く方に好意を抱くような、変わった趣味は持っておりませんから。

「ええ、そのほうがいいと思うわ。旦那様、学園に連絡してくださいませ。入学前にクラス分け用の試験も受ける必要がありますし、登校日の打ち合わせもしなくてはなりませんもの」

「お母様。クラス分けは爵位順ですか？ それとも、成績順？」

「成績順よ。特AクラスからDクラスまでに分かれるの。学期末で成績が下があれば、クラスも落ちるのよ。学園では爵位による付度は一切ないから、リズが頑張ればお馬鹿さんたちと同じクラスにならなくて済むわよ」

私はイーサン様たちのオツムの出来は存じ上げませんが、お母様がそう断言なさるのなら、私が特Aクラス入りすれば学園で彼らと顔を合わせなくて済みそうです。

となれば、早速今日から勉強ですわ。

スキップ制度を使う生徒は、成績も素行も優秀であることが第一条件です。

制度を利用するための試験はクラス分け試験よりも難しいそうなので、頑張らなければいけません。

翌日、早速お父様が学園に連絡してくださり、私はスキップ制度の試験を受けられることになりました。

試験勉強のために、イーサン様との月に一度のお茶会はお断りすることになり、私はブレンディ侯爵とイーサン様宛にその旨をつづった手紙を出しました。

もつとも、手紙を出そうと出すまいと、イーサン様はいらっしゃらないのですけど。ですが、こういう些細な手間を省くと、のちのち面倒なことになりかねません。

侯爵にも手紙を出したのは、お茶会の指示を出しているのが侯爵だからです。

それに、イーサン様だけにお知らせしても、侯爵に伝えてくださらない可能性が高いんですもの。侯爵からは、「気にせず勉強を頑張ってください」というお返事をいただきました。

そして、なんと！ 今回、初めてイーサン様からお返事をいただきましたの。

イーサン様はお茶会のすっぱかしに關しても、毎回何の連絡もありません。十五歳の時からですから、私もすっかり諦めの境地に達しています。

むしろ、今さら来られたら、天変地異の前触れかと思うくらいでしてよ。

それなのに、今回はたった一行とはいえ返事が来たのです。

私は何かの罫か、それとも手紙に毒でも仕込まれているのかと思いましたわ。

ですが、手紙の内容を読んで心からホッと思いました。

『阿呆が俺の婚約者など、恥でしかない』

よかったですわ、天変地異の前触れでなくて。

そして私は、スキップ制度を使うことを決めた自分を心から褒めたいと思いました。

「ビクズが……ブツブツ……滑って転んで全身の骨を折れ……ブツブツ……」

あら？ 私にお茶を淹れてくれているミリアが、何かブツブツ言っていますわ。

小声でよく聞こえないのですけど、何か問題でもあったのでしょうか。

「どうしたの、ミリア？」

「いいえ、エリザベス様。何の問題もございません。少し下からせていただいてもよろしいでしょうか？」

「ええ、かまわないわ」

ミリアが自分から私の側を離れると言うなんて、珍しいですわ。お腹の調子でも悪いのでしょうか。

「ありがとうございます。みんなに知らせなきゃ……ブツブツ」

大丈夫かしら？

足早に退出していくミリアが少し心配ですが、私は再び机に向かうことにしました。

あら？ そういえば、イーサン様からのお返事をミリアに渡したままだったわ。

まあどうせ捨てるのですし、気にすることはありませんわね。

スキップ制度のための試験勉強は、私が想像していたよりも何倍も大変なものでした。

私は、カリスタ伯爵家を継ぐ者として、これまでもそれなりに勉強をしてきました。ですが、ス

キップ制度のための試験内容は多岐にわたり、今までの何倍も多くのことを学ばなければなりませんでした。

学園入学までの一ヶ月、私は一日の大半を机に向かって過ごしました。

ただ、お母様がスキップ制度を導入させるほど優秀だったことは大きな救いでしたわ。当時とは問題も違うでしょうけど、色々と教えていただけましたから。

その甲斐もあって、私は無事にスキップ制度の試験に合格したのです。

ホッとしましたわ。イーサン様のあの『阿呆』発言を思うと、絶対にスキップ制度には受かりたかったんですもの。

「本当に、何様なのかしらね。わたくしの可愛いリズに対して、あんな暴言を吐くなんて。どっちが阿呆なのかしら。まあ、あのお馬鹿さんたちが、特Aに入れるとは思えないけど」

お母様は、イーサン様やドロシー王女が特Aクラスではないと思っっているようです。

私は頑張った甲斐もあって、無事に特Aクラスに決まりましたわ。

もし彼らと同じクラスになっても、私は月に一度の登校日と、試験の時にしか登校しませんから、少しくらいは我慢しましょう。

「クラスごとに制服のタイの色が違うのよ。特Aクラスは、リズが受け取ったブルーに銀の二本線入りよ。お馬鹿さんたちを見かけたら何色か見てみるといいわ」

学園は制服着用です。男子生徒は白のジャケットと空色のパンツ、女子生徒は空色のワンピース

に白のショートジャケットという組み合わせです。タイは、クラス分け試験の結果とともに家に送られてきます。

私も、スキップ制度の合格通知とクラス分けの結果と一緒に、ブルーに銀の二本線入りのタイを受け取りました。

一週間後の入学式が楽しみですわ。

入学式までの残りの期間は、領地経営の実地経験のための準備をしながら過ごしました。

そして迎えた入学式。

私は、イーサン様が仕えるドロシー王女のお姿を初めて目にしました。

ドロシー王女は、噂通り輝く金髪のお美しい方でした。

イーサン様が常にお側にお仕えしていると聞いていましたから、すぐに見つけることができました。

今年の入学生は、ドロシー王女を筆頭に総勢百名ほど。きっと、同学年の中には王女様との縁を期待する人もいることでしょう。

ドロシー王女の二人のお兄様が在籍されていた時は側近を目指す令息や、婚約者を目指す令嬢が同学年に多かったとお聞きました。

クレメンタイン王国では、伯爵家までの出身なら王家に嫁ぐことができます。

ですが、学園卒業時のクラスが最低でもAクラスであることが条件です。

王子殿下方の婚約者のお二人は公爵家と侯爵家のご令嬢で、お二人ともとても優秀な方だと聞いています。

それなのに……ドロシー王女とイーサン様はCクラスなのです。まだ入学時とはいえ、王女とその近衛騎士がCクラスって、大丈夫なのでしょうか。

ドロシー王女は他国の王太子と婚約されているのですけど、興入れ先の国では王立学園での成績は問題にならないのでしょうか。

やっぱりスキップ制度を利用してよかったですわ。

だって、クラスが違ってイーサン様たちに絡まれそうな予感がしますもの。

私の髪は銀髪で貴族には珍しくありませんから、今日の時点ではイーサン様は私に気付かなかったようです。安心しましたわ。

入学式が終われば、私は来月までは登校しませんから、イーサン様と会わずに済みます。

ただ、イーサン様と会いたくないとはいえ、クラスメイトになる方々とは少しくらい仲良くなりたいたのでしつかりご挨拶^{あいさつ}しておきます。

「皆様、初めまして。エリザベス・カリストと申します。スキップ制度を使いますので、月に一度と試験の時しか登校ませんが、仲良くしてくださいと嬉^{うれ}しいですわ」
最低でも、避けないでいただけるとありがたいのですが。

本来なら、私もみんなと同じように毎日学園に通いたかったのです。友達だって欲しいですし。でも、それを犠牲^{ぎせい}にしても、学園でイーサン様たちに絡まれることのほうが面倒だと思ったのです。

イーサン様は侯爵家のご子息ですが、我が家はブレンディ侯爵家に融資していますから最悪の場合、侯爵様に注意していただくこともできます。

ですが……お相手が王女様となると、こちらから物申すことは難しくなります。

いえ、全く手段がないわけではないのですが、とにかく絡まれるのが嫌なのです。
どちらにしろ、学園に通う二年間だけの辛抱^{しんぼう}です。

クラスメイトたちは卒業後にどこかに嫁^{よめ}いだり、爵位を継いだりとそれぞれの道に進むでしょうから、それから交流するのも遅くはありません。

「まあ！ スキップ制度を？ エリザベス様は優秀でいらっしゃるのね」

「学園で一緒にできるのを楽しみにしていたのですが、残念ですわ。でも、ぜひ仲良くしてくださいませ」

「週末にわたくしたちそれぞれの家で交流いたしませんか？ そうすれば、エリザベス様と仲良くになれると思いますの」

皆様それぞれ思うところはあると思いますのに、そんな提案をしてくださいます。

「カタロニア公爵令嬢に、ミリアルド公爵令嬢、ウィナー侯爵令嬢、ありがとうございます。よろ

しく願いますわ」

「でも、スキップ制度をお使いになられるということは……もしかして、あの方々のせいかしら？ お二人ともCクラスとお聞きしましたわ。確かに、面倒ですわよね」

カタロニア公爵令嬢の言葉に、私は曖昧な笑みをお返しします。

一応、我が家は伯爵家ですから、侯爵家や王家に不敬と取られる発言は控えさせていただきますわ。

カタロニア公爵令嬢こと、ダイアナ様はドロシー王女の二番目のお兄様の婚約者ですから、もろもろの事情を把握していらつしやるようです。

公爵家の長女であるダイアナ様は、真つ直ぐな銀髪に、少し猫目の銀色の瞳をしたお綺麗な方で、私は一目見て仲良くなりたいと思いました。

その後、他のクラスメイトの方々ともご挨拶をして、スキップ制度のことなどを話して過ごしました。

皆様本当に親切で、何かあればいつでも力になると、おっしゃってくださいました。

クラスメイトの方々と一通りお話しできましたし、そろそろ帰ろうかと思っていたのですが……安心したのがいけなかったのでしょうか？ 特Aクラスに招かれざる客がやってきました。

「なぜ、ドロシー様がCクラスなのだ！ おかしいだろう！」

廊下から、イーサン様の怒鳴り声が聞こえてきたのです。

もっとも、私は声を聞いただけでイーサン様だと分かるほど、彼と交流していません。声に驚いて振り返った時に、教室の外の廊下に真つ赤な髪が見えただけです。

私の銀髪や王女様のような金髪の貴族は多くいますけど、イーサン様のような赤髪は珍しいのです。

なぜ何も、試験の結果が悪かったからでしょう。

だいたい、卒業後に他国の王族に嫁ごうという方が、下から二番目のクラスって大丈夫なのでしょいか。婚約解消を求められてもおかしくないと思うのですけど。

ドロシー王女のお兄様方はどちらも特Aクラスで、しかもお二人とも首席で卒業されたとお聞きしました。

もしかしてドロシー王女は勉強がお嫌いなのでしょうか。王族の方々の教育係は、とても優秀な先生方だとお聞きしましたのに。

そもそも、イーサン様は誰に向かっておっしゃっているのかしら？

それに、イーサン様はご自分もCクラスだということをお忘れなのかしら？ 仮にも侯爵家の嫡男ですわよね？

確かに、カリスタ伯爵家を継ぐのは私で、イーサン様は女伯爵の夫にすぎません。

つまり、イーサン様はカリスタ伯爵家の事業や領地経営に手を出すことは一切できないのです。ですから、お父様は『自分の道を見つけるように』と婚約時にイーサン様にお伝えしたのです。

ただ、これも酷いとは思いませんでした。

まあ、このことも『証拠』のひとつとして、日記に書き加えておきましょう。

普通に考えて、十五歳で婚約した時から全く婚約者と交流なさらない方を、我が家に迎え入れるなんてありません。

ですが、私がイーサン様との婚約を解消しないのには、簡単にはそうできない理由があるのです。クレメンタイン王国の法律では、一旦婚約を結ぶとそれ相応の理由と証拠、婚約を継続する上での不利益を申請して、国王陛下の許可をいただかなければならないのです。

どうやら、かつて婚約解消や婚約破棄が横行して、国が混乱した時代があったからだそうです。つまり、婚約を円満に解消するためには、イーサン様に婚約者としての態度を改善されては困りますの。

それで、イーサン様がお茶会に来ていないことを、ブレンディ侯爵家にはお話ししていないのです。

別に隠しているわけではありませんわ。

調べればすぐに分かってしまうことです。単にお伝えしていないだけですわ。

誕生日のお祝いも私はカード一枚いただいていませんが、その予算で王女様に何かさしあげたのかもしれないね。

私からお礼状が届かないことを、ブレンディ侯爵ご夫妻は不審に思わないのかしら。

私としても、いただいてもいないのにお礼状なんて出すわけありません。いえ、そもそもいただいてもちっとも嬉しくありませんけど。

物に罪はありませんが、イーサン様に何かいただくくらいなら、領地の子どもに野に咲く花を一輪もらったほうがずっと嬉しいですし。

ところで、イーサン様はいつまで他のクラスの前で、大声を出しているつもりなのかしら。さつきから廊下で喚き続けているようです。

あれで王族の近衛騎士だなんて、騎士の選定はもう少し品性を考慮するべきだと進言したくなりますわ。

本音としてはイーサン様と顔を合わせたくないのですが、誰かに文句を言い始めたようなのです。すがに気になります。

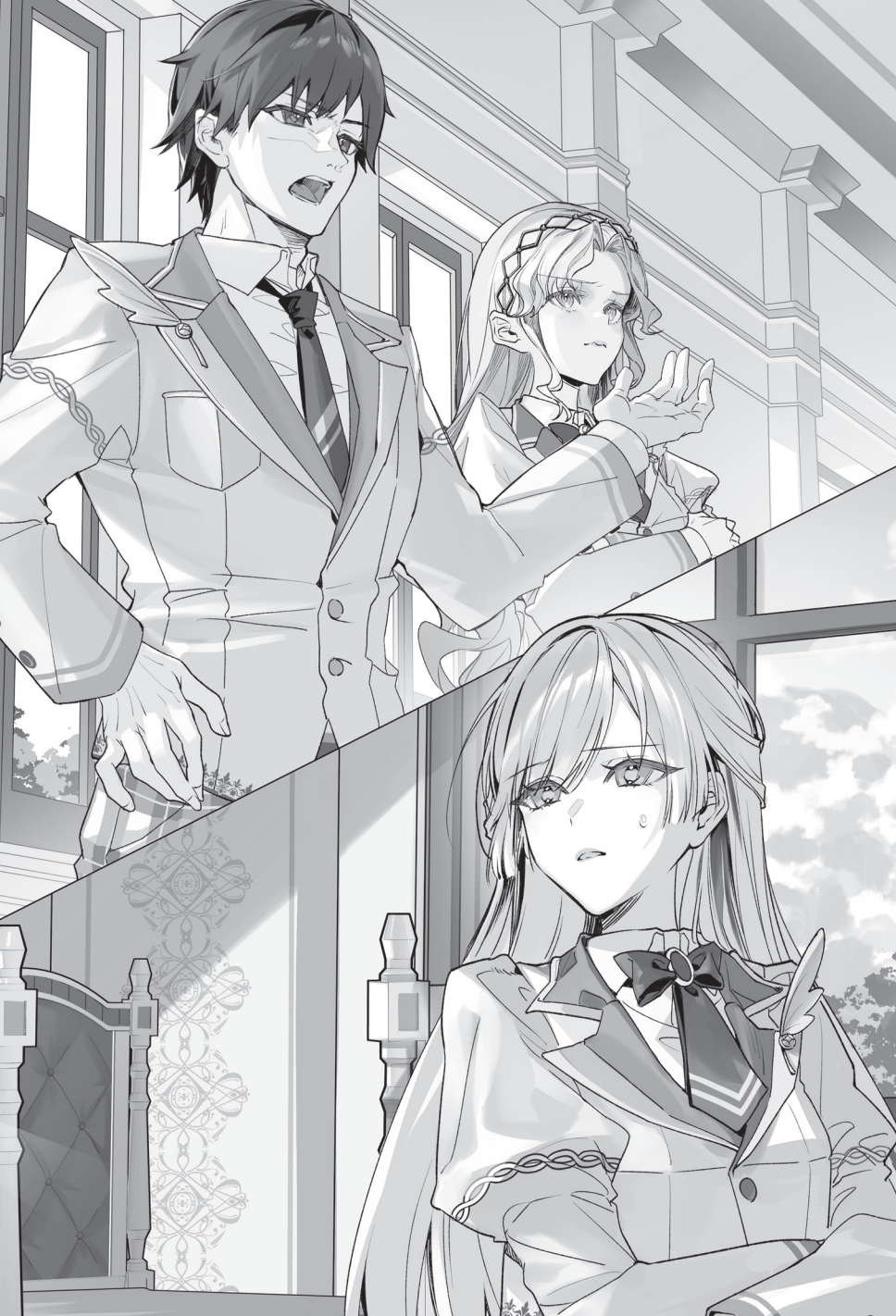
すると、鈴を転がすような声が聞こえてきました。

「イーサン、この方がカトルお兄様に我儘を言つて、私をあんな下位クラスに入れたに違いはないわ」

「もしかして、ドロシー様と自分の試験結果をすり替えたのでしょうか？ この、悪女め！」

「いいのよ、イーサン。だって本来のクラスになったら、イーサンと離れてしまうもの。あなたは私の騎士でしょう？ 側にいなきゃ駄目なもの」

相手の反論する声は聞こえません。



この可愛らしい声の主は、きっとドロシー王女でしょう。そして、カトル第二王子の名前が出たということは……

待ってください。つまり、イーサン様が文句を言っている相手は、第二王子殿下の婚約者であるダイアナ様ですか？

教室の中を見渡しますが、ダイアナ様のお姿はありません。廊下をのぞきこむと、イーサン様の前にダイアナ様が立っていらっしやいました。

クレメンタイン王国宰相のご息女で、公爵令嬢であるダイアナ様相手にあんな口の利き方をされているのですか？

仮にも騎士である方が、令嬢に対してあのような口の利き方を？

ドロシー王女のおっしゃっていることも意味不明ですし。

この二人、本当に大丈夫なのでしょうか？

「ドロシー王女。カトル様が心配されておりましたよ？ 王族がCクラスなど、前代未聞だと。

『このままでは婚約の存続も危ぶまれる』とおっしゃっていましたわ」

「っ！ たまたま体調が悪かったのよ！」

「そうですか。なら、陛下方も安心ですわね。近衛騎士が同じクラスなのも、王女様と離れるわけにはいけないから、わざと点数を調整したということですね」

ダイアナ様の淡々とした声に、教室に残っていたクラスメイトが失笑しました。

ドロシー王女は本当に体調が悪かったのかもしれませんが、イーサン様は間違いなく実力でしよう。

なぜなら、この学園では付度は一切されませんから。王女様がCクラスでも、成績がよければ近衛だろうと何だろうと、別のクラスに振り分けられますもの。

しかし、ブレンディ侯爵家の教育はどうなっているのでしょうか。

侯爵は甘いところがありですから、イーサン様の言葉を鵝呑みにして、事実を確認していないのでしょうか。

でも、入学にあたって、クラス分けの通知もタイも自宅に送られているはずなのに。

私がそんなことを考えていると、イーサン様はダイアナ様の発言に激昂したのか、大きな声を上げました。

「この俺を愚弄するつもりかっ！」

呆れたことに、イーサン様は第二王子殿下の婚約者であり、宰相のご息女であり、公爵令嬢でもあるダイアナ様のことを、自分より下に見ているようです。

もう、証拠集めなんてする必要がない気がしてきました。

だいたい、第二王子殿下の婚約者である公爵令嬢にこんな口の利き方をする方を、王女様の近衛騎士にしているのですか？

国王陛下たちは、唯一の姫君であるドロシー王女に甘いと聞いています。けれど、他国に嫁がせ

るのならそれは悪手でしよう。

いくら二人の王子とその婚約者が優秀でも、ドロシー王女とその近衛であるイーサン様の言動の酷さで、国が衰退する事態を招きかねないですもの。

このまま放っておいては、イーサン様がダイアナ様に危害を加えるかもしれません。

会いたくはありませんが、私が制止したほうが……

そう思って教室を出ようとした時、冷やかな声が辺りに響きました。

「何を騒いでいる」

「っ！　が、学園長……！」

驚愕のあまりか、イーサン様が掠れた声で呟きます。

どうやら事態が収まりそうです。

この学園の学園長が現れたのですから。

「クレメンタイン嬢に、ブレンディ侯爵令息か。君たちのクラスはここではないだろう。いったい何をしている」

バートン学園長は王弟殿下、つまりはドロシー王女の叔父にあたる方です。

ですが、身内最上層をやるような方ではなく、むしろ身内にこそ厳しいという噂があります。

「お、叔父様……」

「学園内では学園長と呼びなさい。クレメンタイン嬢」

「……ご、ごめんなさい」

「再度言おう。ここは君たちのクラスではない。学園では問題を起こせば、身分に関係なく処罰を与える。そのことをよく理解したまえ」

ドロシー王女は、叔父である学園長のことが苦手みたいですね。学園長がいらつしやった途端、怯^{おび}えたようにびくびくし始めたのですから。

学園長は実力主義者で、身分による格差を嫌う方だそうなので、身分重視のドロシー王女とは合わないでしょう。

学園が身分ではなく成績によるクラス分けなのも、学園長の主義に沿っているためです。

イーサン様もドロシー王女も、さすがに王弟殿下が相手では何も言えないようですね。

学園長の圧に、お二人は逃げるように教室の前から立ち去っていかれました。

「お手を煩わせて申し訳ございません、学園長」

「学園内の揉めごとを収めるのは、学園長である私の仕事だ。アレらには貴族としての常識が通じん。特に、カタロニア嬢やカリスタ嬢は標的にされやすいだろう。カリスタ嬢は毎日登校するわけではないから大丈夫だろうが、その分、君に嫌がらせが集中するかもしれない。何かあればすぐに言いなさい」

あの方々に常識がないというのは、私も同意しますわ。

でも、私がないことで、イーサン様やドロシー王女がダイアナ様に迷惑をかける可能性が高ま

るなんて、申し訳なくなりません。

ただ、学園長が目を光らせていくのださるなら、少しは安心ですわね。

その後、無事に家に戻った私は、学園での出来事をお父様とお母様に報告いたしました。お二人もイーサン様の愚行に呆れていらつしやいます。

私、つくづく不思議なのですよね。どうしてイーサン様が私の婚約者になったのか。

だって、ブレンディ侯爵家への融資の対価として、この婚約を受けたのですよね？ なら、もつと他のことにするべきだったのではないのでしょうか？

我が家は爵位にこだわっていませんし、そもそもあんな方を婿^{むこ}にもらつても迷惑だけです。同じ婚約だとしても、侯爵家の寄子の家に、もつとマシな方がいらしたでしょうに。

「ブレンディ侯爵夫妻は、どうしてイーサン様を私の婚約者に？ 婚約した時点で既に傲慢^{ごうまん}な方でしたけど……」

「ああ。あの息子も親の前ではまともに振る舞っているのだろう。ブレンディ侯爵はすっかりそれを信じこんでいる。こっちにすれば都合がいいから婚約を受け入れたが……。だが、今後も何かあつたらすぐに言いなさい。対処する」

「問題は王女様のほうね。本当に、陛下も王妃様も困った方だこと。お二人の王子殿下はあんなにご立派だというのに。王子様方は先王様似で、王女様はご両親……というか、王妃様に似たのかし

らね」

確かに、お母様が言うように、イーサン様よりドロシー王女のほうが問題かもしれません。

王族に言われたなら、たとえイーサン様がまともだったとしても拒否することは難しいでしょう。まあ、そもそもイーサン様はまともではありませんから、そんな仮定は意味がありませんけど。

しかし、ドロシー王女の性格は王妃様似なのですね。

私はまだ成人していませんから、国王陛下や王妃様とお会いしたことはありません。

もちろん、お顔は存じ上げておりますけど。

「王妃様は、どのような方ですの？」

「ええ。あの方は容姿の優れている異性が大好きで、そして何より自分のことが一番大好きなのよ」

なるほど？

確かにイーサン様は、容姿は優れておりますわね。十五歳の時から騎士を目指しておられますし、剣の腕もそこそこなのでしょう。

ドロシー王女が王妃様に性格が似ていらっしゃるのなら、イーサン様はドロシー王女の好みの容姿ということかしら？

でも、ドロシー王女は王族として他国の王族と婚約をされています。

普通は、他国に嫁ぐのに、近衛騎士を恋人として連れていくとは思わないものですけど。それ

とも、イーサン様とは火遊びのつもり？

婚約者やその国が、自分の素行を調べているとは思わないのかしら。

そのことに、国王陛下も王妃様も気付かないのかしら。それとも、気付いていても大丈夫だと思っているの？

「陛下は、王女様をたしなめたりなさらないのですか？」

「陛下はお若い頃に王妃に一目惚れして、決まっていた婚約を解消してまで娶ったんだ。だから、王妃似の王女にはとことん甘い。まあ、こちらとしては都合だが」

え？ お父様、ちょっと待ってください。今、聞き捨てならない言葉があったのですが。

決まっていた婚約を解消してまで王妃様を娶った、ですって？

国王陛下は馬鹿なんですか？

不穏な内容でしたので、私はすぐさまお父様を問い詰めてしまいましたわ。

—— お父様とお母様は同じ年で、同じ時期に学園に通われていました。

同学年には国王陛下もいらっしゃったそうです。

王族である陛下には、幼い頃に決められた婚約者がいらっしゃって、このクレメンタイン王国の公爵家のご令嬢だったのだとか。

お二人はいわゆる幼馴染で、恋し合うわけではなかったものの政略結婚と理解し、それなりに仲良くされていたそうです。

それが、学園に入学して一年が過ぎ、王妃様が入学してこられたことで状況は一変しました。国王陛下——当時は王太子殿下が、後の王妃様に一目惚れされ、結ばれたいと願うようになったそうです。

本来なら、国王陛下は廃嫡^{はいちやく}され、王弟殿下が王太子になられたのですが、当時王弟殿下は既に隣国の伯爵家のご令嬢と婚約されておりました。

他国の伯爵令嬢では王太子妃にするには後ろ盾が弱く、王妃様のご実家が侯爵家だったこともあり、国王陛下は廃嫡を免れたのです。

それだけではなく、もともと婚約者だった公爵令嬢が、国王陛下の恋を応援されたことも大きかったそうです。

政略で婚約した自分よりも、愛する人と一緒になったほうが、どんな苦難も乗り越えられるだろうとおっしゃったとか。

お父様によると、その公爵令嬢はご自分の護衛騎士の方と結婚されて、現在はお幸せだそうですから、もしかしたらご令嬢のほうも陛下よりその方が好きだったのかもしれない。

そのことがあって以来、この国では簡単に婚約の解消ができなくなったそうです。

……ハア。私がこれだけ困らせられているのは、陛下のせいでしたのね。

国王陛下までもがそのようなお幸せな脳の持ち主だとは思いませんでした。

イーサン様といい、ドロシー王女といい、皆様揃^{そろ}って恋愛脳なのですね。

私とイーサン様の婚約は、ブレンディ侯爵家の希望で結ばれたものです。

ですが、イーサン様に『結婚してやる』と言われたり、外野に王女様のほうが相応しいなどと言われるのはごめんです。

私に関わらないでくださるなら、ご自由にしてくださいませんか。

「お父様。以前にもお聞きしましたが、そもそもなぜ、私とイーサン様の婚約を受け入れられたのですか？ 我が家には利がありませんわね？ いいかげん教えていただけませんか」

カリスタ伯爵家は、爵位には全く興味がありませんのに。

ですから、カリスタ伯爵家に婿入りする相手が貴族である必要はないのです。

「……そうだな、そろそろエリザベスにも話しておくか。ブレンディ侯爵令息との婚約は、実は国王陛下からの王命に近いものだったのだ」

「王命ですか？ どうして、そこまで……」

「我が家が、クレメンタイン王国の財政を支えていることは理解しているな？ 陛下は、ブレンディ侯爵家を使うことで、カリスタ商会を王家の管轄^{かんかつ}にしようとしている」

「……」

なんというか……陛下は正真正銘のお馬鹿さんでしたのね。ものすごく分かりですわ。

ですが、それを分かっている、なぜお父様は従っているのでしょうか？

「私は、陛下を退位させようと考えている。爵位を返上し、クレメンタイン王国から出ることもで

きるが、領民や大半の貴族には罪はない。我が家がいなくなれば、この国は間違ひなく衰退する。いや、衰退で済めばいいが、おそらくそれどころじゃないだろう」

「それで、退位を？」

「ああ。そのためには、王命に従っていると陛下に信じ込ませる必要があった。本来ならば、ブレンディ侯爵家をこちら側に引き入れるつもりだったのだが、まさか嫡男があそこまで阿呆だとは。侯爵たちも融資を踏み倒すつものようだし、情けをかける必要はない。婚約はいずれ必ず解消させる。退位のための準備があるから、もう少し我慢してくれ」

「分かりましたわ」

こうなると、私がイーサン様に好意を持てなかったのは不幸中の幸いでしたわ。

お父様の目的が達成されたら、ちゃんと婚約は解消してさしあげますから、安心してドロシー王女との恋を楽しんでいただきたいものです。

次に学園に登校するのは月末。色々と思うことはありますが、それまでは自分のやるべきことをやりましょう。領地にも行つて、自分の目で改善点を見つけないけませんし。

そうこうしているうちに、入学式から一週間が経ちました。今日は我が家にお客様がいらつしゃっています。

「いらつしゃいませ、ようこそカリスタ伯爵家へ。第二王子殿下、カタロニア公爵令嬢」

「突然の訪問を快く受けてくださり、感謝いたしますわ」

「私とは初めましてだね。カトル・クレメンタインだ。よろしく頼むよ」

そう。今日のお客様は、第二王子殿下とその婚約者のダイアナ・カタロニア公爵令嬢です。ダイアナ様は突然と言いましたが、もちろん、三日前に訪問したい旨の先触れをいただいております。でもまさか、第二王子殿下まで一緒にいらつしゃるとは思いませんでしたわ。

たぶん、ドロシー王女の件でいらつしゃったのでしょう。

本来なら、お父様とお母様のご挨拶するべきなのですが、「非公式の訪問だから」とカトル様にお断りされてしまいました。

まあ、公式の謝罪なら、兄である第二王子殿下ではなく、国王陛下がなさるべきですけど。

「愚妹が迷惑をかけた。申し訳ない」

「いえ、私は何も。絡まれていたのはダイアナ様ですわ」

むしろ、イーサン様の件で、私が謝罪しなければならぬくらいです。

全く交流していないとはいえ、書類上はまだ婚約者ですし。

「ブレンディ侯爵家には、カタロニア公爵が抗議の手紙を送った。たかが侯爵令息が、格上の公爵令嬢に暴言を吐くなど、愚かにもほどがある」

「カトル様。お気持ちは分かりますが、ブレンディ侯爵令息はエリザベス様の婚約者ですよ。お言葉が過ぎますわ」

「お気になさらず。私も同じように思っておりますから」

むしろ、愚かなのはウェルカムです。イーサン様が愚かであればあるほど、お父様の思惑通りになりますし。

「……カリスタ嬢は、二年前にブレンディ侯爵令息と婚約したと聞いた。そして、それから全く交流していないとも。なぜか聞いても？」

「私とイーサン様が婚約したのは、ブレンディ侯爵家が我が家に融資を頼み込んできたからです。ブレンディ侯爵家の希望で、イーサン様が私の婚約者になりましたの。ですが、イーサン様は嫡男である自分が伯爵家に婿入りするなんて、納得いかなかったようなのです」

別に、私がイーサン様を望んだわけでもありませんのに、と本当は続けたかったのですが、我慢しました。それに、王命に近い婚約だということも言わずにおきました。

第二王子殿下やダイアナ様を信じていないわけではありませんが、お父様の目的を勝手にお話しするわけにはいきませんから。

まさか、陛下が我が家の商会を乗っ取ろうと考えられていて、さらにその陛下をお父様が退位させようとしているだなんて。そんなこと、この場では決して言えませんか。

人がいいと言えば聞こえはいいけれど、どうにも自分にも家族にも甘いブレンディ侯爵夫妻。

そんなお二人ですから、侯爵夫妻が信用していた家令にお金を使い込まれて、領地経営が立ち行かなくなってしまうたのも当然の結果といえるでしょう。

そこで、ブレンディ侯爵は、クレメンタイン王国筆頭の資産家である我が家に融資を願ひ出た、というわけです。

カリスタ伯爵家にはちょうど息子と同年の一人娘がいるから、息子と婚約させればきっと融資を快諾してくれるだろう。もしかしたら返却もしなくても済むかもしれない。

そんな甘い考えで、嫡男のイーサン様を私の婚約者にしたのです。陛下のあと押しがあったことも、ブレンディ侯爵家には都合がよかったのでしょう。

はっきり言って、ありません。

カリスタ伯爵家は貴族であると同時に、多くの商会を手掛けている商人です。

商人の基本は、信用と対価。対価なくして物を売ることはありません。

当然のことながら、ブレンディ侯爵家への融資にも契約書が存在します。

たとえ私とイーサン様が婚約を結んだとしても、契約書通り、融資したお金は期限までに全額返済していただくに決まっています。踏み倒すなんて、絶対にさせません。

こちらはいくらにもない婚約をさせられた上に、それを解消するために時間と労力を使っているのです。

イーサン様の有責で婚約破棄をして、さらに慰謝料までいただきたいくらいですわ。ただ、破棄を目指すとなると、今以上に証拠が必要になり大変ですから、婚約解消で我慢してあげますけど。

よりによってイーサン様のお相手は、国王陛下のご息女。すんなり有責を認めてくださるとは到

底思えません。

時は金なり。私だってこれ以上、余計な時間はかけたくありませんもの。融資の返済期日に合わせて、必ず婚約を解消いたします。

ですが、お父様たちのお話や王子殿下たちの様子を見てみると……無事に解消できるのか少し心配になってきました。婚約解消の書類には、国王陛下の玉璽ぎやくじが必要ですから。

あとでお父様に、どうお考えなのか確認しておきましょう。

「第二王子殿下。お聞きしたいのですが、国王陛下と王妃様は、王女様とイーサン様のことをどうお考えなのでしょう？」

「すまない。愚妹ばかりか両親がきちんと叱責しっせきしないせいで、カリスタ嬢には迷惑をかけている」
いえ、謝っていただく必要はありません。

婚約者の愚行を放置しているのは、私なのですから。

「謝罪は不要ですわ。私は単に、陛下たちがこの先どうするおつもりなのかを知りたいだけなのです」

「……ドロシーの婚約者は、クシュリナ王国の王太子だ。陛下の生誕祭に訪問していた王太子殿下にドロシーが一目惚れして、父が頼み込んで成立した婚約なんだ。このままでは、こちらの有責で破棄されるのではないか、と兄上も心配していた。父にも何度も苦言を呈しているのだが……」
それでも制止なさいませんのね。

でも、学園の成績がCクラスでは、王太子妃にはなれませんわよ？

王子や王女という身分は、王家に生まれれば自動的に手に入りますが、王太子や王太子妃となると話は別です。

そもそも、王族は国の顔ですから、幼い頃からきちんとした教育を受けるはずです。ドロシー王女も受けて……ますわよね？

少なくとも目の前にいる第二王子殿下と、上のお兄様である第一王子殿下は学園を首席で卒業されたとお聞きしましたし、ちゃんと常識をお持ちのようです。

となると、やっぱり国王陛下と王妃様が、娘可愛さに甘やかしたのでしょうか。そんな方を他国の王族に婚約者として差し出して、大丈夫だと思っているのかしら。下手をしたら、国際問題になりかねません。

いえ、今の時点で既に大問題ですわね。我が国のほうから婚約を申し込んでおきながら、ドロシー王女と近衛騎士に正しくない距離感でいさせるなんて、いつ婚約破棄を申し渡されてもおかしくありません。

「間違いないく婚約破棄される状況だと思いますけど、陛下たちは危機感をお持ちではないのですか？」

「……さすがに父もドロシーに、ブレンディ侯爵令息との距離感は問題だと注意をしたのだが、ドロシーが泣きながら、『そんなつもりはない』と言ったのだ。母上がドロシーを擁護しだして、そ

うなると父上も母上には甘いから……」

ああ、やっぱり。国王陛下も王妃様もそしてドロシー王女も、王族として相応しくないお方のおうですね。

お父様から、国王陛下ご夫妻が浅はかであることは聞いていましたけど、息子である第二王子殿下の口から改めて聞くと、ため息しか出ませんわ。

第一王子殿下と第二王子殿下、そして王弟殿下が聡明な方々なのが、唯一の救いですわね。

「カリスタ嬢は、婚約者のことをどう思っているんだ？」

「私、ですか？　そうですね。私に関わらないでほしい、でしょうか」

「関わらない？　だが……」

「婚約の解消に手間と時間がかかることは、第二王子殿下もご存知でしょう？　これは陛下たちには秘密にしていたのですが、実は、私は現在その準備中なのです」

玉璽をいただくために、第一王子殿下と第二王子殿下には味方にもなってもらいたところ。できれば、ダイアナ様にも味方になっていただきたいですわ。王子殿下たちは既に学園を卒業されていますから、学園内での味方を一人でも多く作っておきたいのです。

我が家はクレメンタイン王国筆頭の資産家ですから、普通に考えたら王家も無碍にはできないはずですが、常識の通じない方々はそういうことを理解されませんもの。

「婚約の……解消を狙っているのだと」

第二王子殿下の呟きに、私はコックリと頷きます。

本当は、まだ婚約の解消について話すつもりではありませんでした。

もちろん最終的には、ブレンディ侯爵家の方々やイーサン様ご本人、そして許可をいただく国王陛下にも知らせることになります。ただ、準備時点で他の方の思惑が絡むことは避けたかったです。

ですが、先ほどの第二王子殿下のお話を聞いていたら、国王陛下の玉璽がいただけない可能性が浮上してきました。

末娘であるドロシー王女を溺愛なさっている王妃様と、その王妃様のご機嫌を損ねたくない国王陛下。

きっと、ドロシー王女自身は私とイーサン様の婚約解消を喜ばれるでしょう。ですが、ドロシー王女にはクシュリナ王国の王太子との婚約があります。イーサン様と結ばれるわけにはまいりません。

かといって、近衛騎士として連れていくことも難しいのではないのでしょうか。

イーサン様が結婚していて、妻とともに向かうなら、クシュリナ王国側も許容してくださるかもしれません。

でも、さすがに未婚の騎士……しかも王女とよからぬ噂のあった騎士を側に置くことを認めるとは到底思えませんわ。

となると、国王陛下が私とイーサン様の婚約解消を認めてくださらない事態になってもおかしくありません。

もし認めてくださるとしても、ドロシー王女がイーサン様を連れて嫁ぐことを、クシュリナ王国が認めてからになるでしょう。

冗談じゃありません。それまで待てませんわ。

「第二王子殿下、どうか私にお力をお貸しください」

「……すべてを打ち明けてくれるのなら、兄上にも協力を取り付けよう。もちろん、このことを父上たちに話すことはない。そこは信じてほしい」

第二王子殿下と話すのは今日が初めてですから、どんな方が詳しくは知りません。ですが、嘘を吐く方ではないでしょう。

「父と母に相談してからでもかまいませんか？ 私の独断で話すわけにはいきらないのです。今夜、両親と話して明日にでもご連絡さしあげます」

そもそもこの婚約には、お父様の思惑が絡んでいるのです。

私が勝手に話すことで、お父様が今までしてきたことが無駄になつては困ります。

「分かった。私も兄上に話をしておく」

そのあとは、たわいない話をしながらお茶とお菓子を楽しみ、お二人は帰っていかれました。「お父様たちに、お時間をいただきたいと伝えてくれるかしら」

「はい、すぐに」

ミリアはそう言うと、部屋から出て行きました。

それにしても、お父様の許可も得ず、第二王子殿下にあんなお願いをしてしまうなんて。私は、随分と不安になっていたようです。

『ドロシーの婚約者は、クシュリナ王国の王太子だ』

第二王子殿下のその言葉を思い出し、チクリと胸が痛みました。

もう諦めていたはずだったのに、やはり駄目だったようです。

ミリアが戻ってくるまで、私は空になった紅茶のカップをぼんやりと眺めて過ごしました。

お父様たちは、すぐに時間を取ってくださいました。

カリスタ伯爵家の当主執務室で、私は両親と向かい合って座ります。

「第二王子殿下に協力の要請をしてしまいました。勝手な真似をして申し訳ありません」

私が謝罪すると、お父様は厳しい声でこうおっしゃいました。

「第二王子殿下と第一王子殿下なら、きっとこちらの意を汲んでくれるだろう。だが、不安だからといって先走ってはいけません。一旦立ち止まって、周囲を見る余裕を持ちなさい。お前の判断で、私たちだけでなくカリスタ伯爵家に関わる多くの人の人生が左右されかねないんだ。それを忘れてはいけませんよ」

「はい、お父様。肝に銘じます」

「ふふっ。リズ、お父様は怒っているわけではないのよ。それに、リズの気持ちもよく分かるわ。相手があの二人ですもの。色々と思うところがあつて当然よ」

お母様は私を気遣うようにおっしゃってくださいましたけど、今回は完全に私の判断ミスですわ。先に、お父様に相談するべきだったのです。

「明日、殿下たちにすべてお話ししよう。協力を得られれば、陛下たちに悟らせずにことが進めやすくなる」

「リズ、婚約解消まであと少しよ。頑張りましょうね」

「はい、お母様」

殿下たちの協力があれば、玉璽の件もどうにかなるかもしれません。

その夜、私は自室の窓から夜空を見上げ、遠く離れたところにいる『あの方』のことを思い浮かべました。

イーサン様との婚約が成立する前に大好きだった、『あの方』のことを。

私とあの方が出会ったのは私が十歳、あの方が十三歳の頃です。

お父様のお仕事でクシュリナ王国に行っていた時、王宮でお会いしたのが最初でした。

商談をされているお父様の側で退屈していた幼い私を、あの方は王宮のお庭へ連れていってくれたのです。

一週間続いた商談の間に、私は優しい兄のようなあの方を慕うようになっていました。

あとでお聞きしたことですが、クシュリナ王国の国王陛下と王妃様も、私をあの方の婚約者にとお考えだったそうです。

もう少し私が大人になったら、二人の婚約の話を進めよう、そう話し合っていたということでした。

ですが、それより早く、あの方とドロシー王女の婚約が成立してしまったのです。

この気持ちが兄に対するものではないと気付いた時には、既にあの方は他の人の婚約者になってしまっていたのです。